

思考過程における認知プロセスとしてのメタファー ——アリストテレスのメタファー理論の認知言語学的考察——

香 春 (名古屋大学)

0 はじめに

本論では、アリストテレスのメタファーの定義について、認知言語学の最新の議論を参照しながら、その意義について理解を深めたい。というのは、アリストテレスによるメタファーの分析は、哲学史上、最初の本格的なメタファー研究として評価することができるからである。

メタファー研究は、アリストテレス以来、現代に至るまで、様々な理論が展開されて来たものの、その多くは、表現論や言語論の立場から論じられたものが多く、メタファーを単なる言葉の綾として見なして来た。特に、古代修辞学及び、アリストテレス以降における修辞学では、メタファーは、直喩と同様に、単なる言葉の綾、所謂、修辭的文飾の技巧として扱われてきた。しかし、近年、メタファー研究が更なる展開を辿り、メタファーとは言語活動のみに特有のものではなく、人間の思考や行動にまで深く関わっていることが明らかになった。

そもそも、アリストテレスは、メタファーにどのような定義を与えたのだろうか。本論では、上に述べたとおり、その本質を探り、認知言語学的アプローチから再考察するのだが、その際、レイコフとジョンソン (George Lakoff & Mark Johnson, 1980) の「概念構造としてのメタファー理論」とフォコニエ (Gilles Fauconnier) の「メンタル・スペース(mental space)」理論を手がかりとする。なぜ、彼らの理論を手がかりとするのか、次のような二つの理由が考えられる。一つは、これらの理論では共通して、メタファーとは、修辞学でいうように、様々な修辭的文彩の中の、単なる一分類ではなく、広い意味で修辭的文彩一般を指す、広義のメタファーとして理解されているということがある。もう一つは、これらの理論では、メタファーとは、異なる概念領域、ないしは精神領域を結びつける「投射マッピング」で

あると理解されており、メタファーとは<カテゴリーの移動>、ないしは<思考様式の転換>であると考えられているからである。

とくに、レイコフとジョンソンの「概念構造としてのメタファー理論」では、メタファーとは、主に異なる種類の経験（例えば、具体的領域の経験と抽象的領域の経験、つまり経験的概念と抽象的概念）を結びつける投射マッピングとして機能するとされている。つまり、現実世界において、我々が実際にやっている経験同士を結びつける投射マッピングとしてメタファーは機能している。他方、フォコニエのメンタル・スペース理論では、メタファー的投射マッピングは精神世界におけるスペース同士（つまり、抽象的概念同士）を連結する働きをする。それは、概念化及び思考の媒体であり、我々が概念化する事態は全て、メンタル・スペースによって表示される。従って、投射マッピングとしてのメタファーは、ある種の思考様式の転換として表示される。その意味で、メンタル・スペース理論はメタファーに関する問題を複雑化しているのではなく、メタファーを、意味構築の過程として提示しようとする試みなのである。

以上のように、本論では、メンタル・スペース理論は主に、概念構築の過程を提示する重要な理論として見る。すなわち、アリストテレスによるメタファーの定義の真の意義は「名称の転用」にあるのではなく、「種と類によるカテゴリーの移動」および「アナロジー的思考」（本論では思考様式の転換として扱う）によって、新しい概念を構築することにあると考えられる。つまり、結論として、認知的視点から構築されたメタファー理論こそが、アリストテレスのメタファー理論に最も近い理論であるとのテーゼが提示される。

1 メタファー研究の始まりと危機

メタファーという言葉で我々は何をイメージするのだろうか。

手元の辞書を調べてみると「暗喩ないし隠喩。⇒シミリ」と書いてある。そして、その解説のところに、「比喩法の一つ。<...のようだ>、<...のごとし>などの形を用いず、そのものの特徴を直接、他のもので表現する方法」とある。しかし、一

般に辞書では、メタファーは「修辞学的文彩の一つ、直喩の凝縮した型」と定義する。しかし、このような単なる修辞学的装飾としてのメタファーに研究する意義があるのだろうか。それは、他のやり方でも語りうることを楽しむという心境で語っている語り方に違いない。ところが、メタファーはあらゆる文彩の中で、最も輝かしい研究対象の一つでありながら、具体的な事例としては、メタファーのリストへの記載をも拒んでいる例がある。例えば、「机の脚」、「クリスマスが近づいて来た」、「時の流れに身を任せ」などはそれ自体、メタファーだとは認識されていない。その証拠に、これらの表現がメタファーと言え、大抵の場合、驚くことに違いない。これらは、我々の日常生活の中でよく使われる表現であり、一見したところ、メタファーだと気づくことが難しい。それどころか、それらの表現が、我々の日常生活の営みの一部分となっているため、文字通りの表現のごとく認識されることがほとんどである。

そもそも、メタファーとは何だろうか。どのように捉えたらよいのだろうか。メタファー (metaphor) という語は、もともとはギリシア語の「メタフォラ」(metaphora)に由来するが、「メタ」とは「と共に」とか「によって」などという意味と空間的位置関係(among, along with, over, above)や時間的順序関係(after, next to)を示す前置詞であり、「フォラ」は「運ぶ」(bear, carry)などを意味する(pherein)の変化した語形であるから、メタファーは一般に「ある場所から他の場所への移動」の意味で使われる。つまり、メタファーは、「～へと移動させる」という意味を表し、「空間的な位置関係」と「時間的な順序関係」に関わる運動のことを言う。

しかしながら、伝統的修辞学では、メタファーを単なる修辞的文飾の技巧として扱ってきた。それどころか、多くのメタファー理論でも、メタファーは直喩の如く、修辞的文彩の一つとして定義されて来た。ところで、アリストテレスは、メタファーという名辞を『詩学』において用い、メタファーとは、単なる修辞的技巧ではなく、修辞的文彩一般を指す、と論じた。そこで、広義のメタファーが誕生したこととなった。

アリストテレスは『詩学』の中で、メタファーとは「ある事柄の名称を他の事柄に転用すること」と定義し、四つの型を提案した。この四つの型は有名であり、「種と類の関係に基づくカテゴリーの移動」と「思考様式」を表している。しかし、アリストテレスのメタファーは、アリストテレス以降の後世において、それぞれ、提喻 (synecdoche)、換喻 (metonymy)、隠喩 (metaphor) の三種類に分けられ、最後の「類比関係」 (analogy) に基づく言葉の転用のみがメタファー (metaphor) として解釈されるようになった。すなわち、メタファーの定義は広義から狭義へと変わった。この修辞学による分類法は、メタファー研究を絶滅させる危機に陥れた。

ポール・リクール (Paul Ricœur) によれば、この修辞学的な分類法はアリストテレスの修辞理論 (elocutio) を行き詰まった道へと押し込んでしまったという¹⁴。アリストテレスの弁論術は、議論法理論 (inventio) と修辞理論 (elocutio)、言述の構成理論 (compositio) から成り立ち、修辞理論は哲学と密接な関係にあることが分かる。つまり、アリストテレスでは、修辞理論は、弁論術において、他の二つの理論の中に位置づけられ、その全体の流れから見れば、哲学と離れてはいけない関係にあることが分かる。それにも関わらずアリストテレス以降、修辞理論は哲学的考察から離れてしまったのである。

その後、この死んだ科学が再び復活したのは、言語学を通してであるが、この言語学的視点から構築された修辞学は、アリストテレスの修辞理論そのままではなく、非常に制限された理論となった。さらに、アリストテレスのメタファー理論は、修辞学者達に都合の良いように解釈され、メタファーの定義は、再び、単なる修辭的綾の一つとして見なされるようになってしまった。

2 『詩学』と『弁論術』におけるメタファーの定義

アリストテレスは、メタファーという名辞を彼の著作『詩学』と『弁論術』の両方で異なった位置づけをしている。このことが謎である。とはいえ、彼が残した謎は、これだけではない。しかしながら、少なくとも次のことが明らかである。『詩学』では「悲劇詩における人間行動の模倣 (mīmēsis)」を目指す、弁論術では

「弁論における説得」を目指す。つまり、メタファーは「名称の転用」という共通の核（構造）を持ちながら、違う機能（役割）を果たすように位置づけられているのである。

2. 1 『詩学』におけるメタファーの定義

But the greatest thing by far is to be a master of metaphor. It is the one thing that cannot be learnt from others; and it is also a sign of genius, since a good metaphor implies an intuitive perception of the similarity in dissimilars⁽²⁾.

メタファーを使いこなすことは、何にも勝る重要なことである。ただこの能力だけでは、他人から学びとることができない。それは生来の能力の証である。というのも、よいメタファーは、[似ていないものの間に]似ていることを見て取ること[直観的に知覚すること]だからである。

アリストテレスは『詩学』の中でこのように語った。彼によれば、メタファーを作る能力は誰にも備わっているわけではない。それは、学習能力とは違って、経験から学び取ることができない、見習うこともできない。その人に生来備わった能力である。この能力とは、似ていることを見抜くことである。

アリストテレスのこの発言を、我々はどのように解釈したらよいか。そして、「メタファーを使いこなす」とは、どんな意味を表しているのだろうか。私が思うに、ここでのいう、「メタファーを使いこなすこと」とは、「名称の転用」を上手く操ることを言い、主に「詩人」のことを指すように思われる。なぜならば、詩作のためには言葉の措辞が一番有効であるからである。アリストテレスによれば、措辞の卓越した状態とは、「文章が明瞭」であって、しかも「平俗ではない」という点にある。詩人が「文章の平俗さを抜け出す」ためには、「言葉の転用」を用いる必要があった。すなわち、もともとは別の事柄を指し示す名称を他の事柄へと転用する必要があった。なぜならば、『詩学』は悲劇詩における人間行動の模倣（mīmēsis）

に注目し、悲劇詩人たちが語法と音楽によって、いかに人間行動を再現するかを解明しようとする^③。

アリストテレスによれば、このような「名称の転用」あるいは、「言葉の転用」は以下のような仕方で行われる。その仕方には「類から種への転用、種から類への転用、類を同じくする種から種への転用、類比関係(アナロジー)に基づく転用」といった四つの型がある^④。ところで、この四つの型こそが、アリストテレスのメタファーの重要な特徴である。つまり、メタファーとは単なる「言葉(意味)の転用」ではなく、重要なのは「種と類の関係に基づくカテゴリーの移動」と「思考様式」であるということである。

すなわち、特に強調したいのは、アリストテレスが定義しているメタファーの四つの型は、単なる名称の転用のことではない、ということである。その定義の規定で最も大事なのは、アリストテレスのメタファー論は、＜我々がある事柄について考えたり、行動したりする＞時の仕方を我々に提示してくれたことにある。例えば、＜アキレ^{ウス}は勇猛に敵を攻撃した＞その体勢を、我々はまさに＜ライオンが食べ物を得るために、他の動物へと勢いよく迫っていく＞状態の如く理解し、そのように考えた上に、そう表現したものである。要するに＜アキレ^{ウス}が勇猛に敵を攻撃した＞その瞬間を、＜ライオンが突進した＞と認識し、そのように表現したのである。メタファーとは、我々が実際にそのように認識したことを、そのように考えて、そのまま表現しているに過ぎない。そこにはいかなる言葉の加工も見られない。上述したアリストテレスのメタファーの定義には、このように貴重な見解があることを我々は察知しなければならない。

メタファーに関するそのような洞察を明確にしたのは、本論で見る、レイコフとジョンソンの共同研究とフォコニエのメンタル・スペースの研究であると考えられる。この二つの研究によって、メタファーとは異なる概念領域に跨がる横断マッピングであることが分かった。つまり、彼らのそのようなメタファーの理論は、アリストテレスのメタファーの定義を最も近い形で解説した理論に違いない。そこで本論では、アリストテレスにおける「種と類の関係に基づくカテゴリーの移動」と「思考様式の転換」は、なぜ引き起こされるかに関するメカニズムを、＜異なる概念領

域に跨がる横断マッピング>でもって説明したい。つまり、それらの「カテゴリーの移動」を成り立たせる「種と類の関係」は何かの繋がりによって結びつけられていると考えたい。本論では、その繋がりとは異なる概念領域を結びつける投射マッピング>である、と考える（このことについては、上述の理論の理解を深めたうえで、詳しく説明することとする）。

そして、アリストテレスが言う「名称の転用」に関しては次のように理解することができる。「名称の転用」とは、本来は別の事柄を指し示す名称を他の事柄に転用することであると。アリストテレスのカテゴリー論によれば、これは「同名異義」と呼ばれる現象である。すなわち、名称だけが共通であり、その名称に対応した、事象の本質を示す説明規定は互いに異なるものである⁶⁾。例えば、‘foot of the mountain’の‘foot’は、もともとは人間や動物の身体の一部を指し示す名称であるが、この場合には「山の下の方の部分」を指す。それと似たような例は、「机の脚」の「脚」もまた、もともとは人間や動物の身体の一部を指す名称であるが、「机」という物体に転用され、「机」を支える「柱」として使われた。以下では、そのような転用がどのように行われるかに関して、アリストテレスの定義に即して分析してみよう。

2. 1. 2 メタファーの四つの型

(a) 類から種への転用

類から種への転用とは、つまり全体で部分を表すことを言う。修辞学では、「類による提喻（synecdoche）」と定義される。例えば、「ボールペン」を「ペン」と言い表すとき、「花見」の「花」は「桜の花」のことを言うなど。このような事例は我々の日常生活の中にたくさんある。焼き鳥の「鳥」は「鶏」を指し、焼き肉の「肉」は「牛肉」を指す。

アリストテレスが用いた例は、「ここに私の船が停まっている」というものである。ここでは「停まる」という「動いているものが動かなくなる状態」を全体的に指示する言葉によって、船が「停泊している」状態を表している。

(b) 種から類への転用

種から類への転用とは、(a)とは逆のパターンで、部分で全体を表す。修辞学では、「種による提喩 (synecdoche)」と定義される。アリストテレスが用いた例は、「げにもまことにオデュッセウスは、万に及ぶ勲を立てた」というものである。つまり、一万は多数の一種であるが、いわばこの事例での万は、類としての多数の代わりに使われている。

(a) と (b) の両方は、アリストテレス以後の後世において、修辞学では、「提喩」として扱われる。そして、認知言語学では、提喩は「プロトタイプ」と言う概念で説明される。つまり、提喩の本質的な働きはプロトタイプ化で、問題のカテゴリーの中の典型的なもの、代表的なものに焦点が合わされている。

(c) 類を同じくする種から種への転用。

この種の転用はアリストテレスの後世において、換喩 (metonymy) と定義され、「あるものと関係を持つ他のものを指し示す」という役割を持つ。そして、換喩にはいくつかのパターン^⑥があり、その中の一つは「部分—全体」によるケースである。すなわち、換喩は提喩を包含する。

アリストテレスの例としては、「青銅で命を汲み取って」と「水を鋭い青銅で切り取って」とが挙げられている。「汲み取る」も「切り取る」も「取り出す」の一種であるが、それら二つの種が、相互に交換するような仕方で用いられているのである。

(d) 類比関係 (analogy) による転用。

類比関係 (analogy) とは、A に対する B の関係が、C に対する D の関係に類似している場合に成立する。アリストテレス以降の後世において、この種の転用のみがメタファーとして理解されるようになった。しかしながら、この四項関係がアナロジーではなく、単なる二つの対象の間の類似性として解釈されることが多い。厳密に言って、アリストテレスが言う「類比関係」とは、二つの対象の間の属性的な類似性ではなく、むしろ、複数の対象の間に成立する事態と事態とに関する「アナロジー的思考」のことを言っている。

アリストテレスの例として、老年が人生に対する関係が、夕暮れが一日に対する関係に等しいところから、夕暮れを「一日の老年」と言い、老年を「人生の夕暮れ」という場合を挙げる。これは、所謂、アリストテレスが言う「肯定集積的交換法」である。さらに、われわれの日常的な身近にある例としては、人間にとっては、体を支え、また歩くのに使う部分を「あし」(足・脚)といわれるが、しかし、物体に対して、机をたとえて見ると、机には机それ自体を「支えているもの」、「柱」があるが、それを表す適切な単語がない。そこでよく考えてみると、机を支える「柱」は、漠然とはあるが、人間の体を支える脚と、その役割が似ている。机を支える「柱」は、人間の「脚」のように歩けないけれども、「脚」といわれるようになったと考えられる。この時に、メタファーは、既存の標準語がないため、その意味論的欠陥を埋める意図で用いられた。

もう一つの方法は、「A に対して、A の相関者 B の本来的な機能 (意味) を否定して、それを A の形容とする」方法である。本論では、「機能否定式修飾方法」と名付ける。例えば、アリストテレスが提示した「アキレウスとライオン」の例を類比関係に基づいて考えてみよう。つまり、「アキレウスはライオンのように突進した」といえば、アキレウスは彼の戦い相手 (敵) に対して、「ライオンが食物を得るために他の動物に対して猛烈に走って行く」ように、勢いよく相手を攻撃したことを表している。すなわち、ここでは、「アキレウス : 他人 = ライオン : 他の動物」のような四項を持つ類比関係が働いている。決して単なる、属性的類似性のことを言っているわけではない。同時に、アキレウスの相関者である戦い相手 (敵)

の本来的な機能(意味)を否定して、それをアキレウスを形容する修飾形で用いる。つまり、ここからは、「ライオンのようにアキレウスが勇敢である」という直喩的な意味が得られる。

つまり、類比関係に基づく言葉の転用には、修辞学でいうメタファーに当てはまる「肯定集積的交換法」と直喩に当てはまる「機能否定式修飾方法」の種類がある。この二つの方法をはっきりさせることが、アリストテレスのメタファー理論を理解する上で重要な点である。なぜならば、それは、直喩とメタファーの関係を把握する鍵であるからである。

2. 2 『弁論術』におけるメタファー

The simile also is a metaphor; the difference is but slight⁽⁷⁾.

直喩もまたメタファーである、その違いはわずかである。

このようにアリストテレスは『弁論術』の中で初めて直喩(エイコーン、simile)について語った。それによれば、直喩をメタファーに従属させ、メタファーの一種として定義した。すなわち、メタファー(metaphor)には、『詩学』で提案した四つの型とは別に、もう一つの型が存在するという。つまり、直喩(simile)である。ここまでは、何の疑問もなく、メタファーとは、全ての修辭的な文彩を指し示す名辞である、と理解してよい。

しかし、アリストテレスの次の発言には後世の修辞学と異なる点がある。

Those which succeed as metaphors will obviously do well also as similes, and similes, with the explanation omitted, will appear as metaphors. But the proportional metaphor must always apply reciprocally to either of its coordinate terms.

メタファーとしてうまく行く（成功する）ものは、それらは明らかにまた直喩（simile）としてもうまく行くだろう。また直喩（simile）はその説明を省略すれば、メタファーとなるだろう。しかし、比例からできたメタファーは同じ類に属する二つのものの一方を他方へ相互につねに適用できなければならない^⑧。

なぜ、このように、アリストテレスは、メタファーを『詩学』と『弁論術』の両方で異なった位置づけをしたのだろうか。それに関しては、様々な言い方がある。一部の人は、『詩学』でのメタファーの定義が無条件に使われているため、その使用を制限するためであるという。また、一部の人は、『詩学』で論じられなかったことを『弁論術』で補足する形で再び論じたという。いずれの意見も理屈があるように思われる。

しかし、上の引用でその謎が解かれたことになるだろう。アリストテレスによれば、メタファーとは修辭的文彩一般を指すものである。つまり、直喩はメタファーの一つの形に過ぎない。直喩以外にも、提喩、換喩などの文彩を含む。しかし、アリストテレス以降の後世の伝統的な修辭学では、「メタファーを直喩の一種類である」と考え直す。この見方は、アリストテレスのメタファーの定義とは正反対であり、明らかに違う。

では「直喩は、その説明を省略すれば、メタファーとなり得るだろう」という、アリストテレスの発言をどう説明するのか。

次の、アリストテレスが提示した例^⑨を見てみよう。アリストテレスによれば、「彼（アキレウス）はライオンのように（敵に）突進した」というときは、直喩である。「ライオンは突進した」という時、メタファーである、という。

直喩の例では、アキレウスが彼の戦い相手を勢いで攻撃する様子は、ライオンが食べ物を得るために、他の動物を攻撃する様子が似ていることから、アキレウスをライオンに喩え、アキレウスの勇敢なところを、ライオンが他の動物を攻撃する時の猛烈さに喩えている。すなわち、これは、類比関係に基づく「機能否定式修飾方法」である。つまり、ここでの、ライオンという名称は、本来的な意味（機能）が

失われ、単なるある特定の人物（アキレウス）の勇敢さを示すために用いられた、言葉の修飾に過ぎない。

メタファーの例「ライオンは突進した」を理解するためには、一連の背景知識が必要となる。注目すべきことは、直喩の例では「一匹のライオン」（a lion）と使われ、メタファーの例では「そのライオン」（The lion）と使われている。つまり、この二つのライオンは異なる。直喩の場合、ライオン（a lion）は、ある特定の人物アキレウス（he）を修飾している、あるいはその特定の人物の突進の仕方を副詞句として修飾している。

それと違って、メタファーの例における The lion が何を指し示しているかを理解するには、次のような事情を考慮しなければならない。つまり、話し手がいて、ある特定の状況について話している、そして、それを聞いている人がいるという発話状況である。つまり、ある特定の対象というより、ある特定の状況を考慮しないと理解ができない。

この二つの例、つまり「彼（アキレウス）はライオン(a lion)のように突進した」と「ライオン(The lion)は突進した」が同時に提示された時、一見して、「彼（アキレウス）はライオンのように突進した」は直喩であるとすぐにわかる。しかし、「(その)ライオンは突進した」は比喩であることがそう簡単に分らない。この文は、単独で提示された場合、我々は「特定のライオンが何かに向かって突進した」と文字通りに理解することが出来る。

しかし、「彼（アキレウス）はライオン(a lion)のように突進した」という直喩で表現されたのと同じ状況を見て、「ライオンは突進した」と、ある人が話したとしたら、これはメタファーであるということになる。

いわゆる、修辞学で言う換喩のことである。つまり、アリストテレスのメタファー論では、「類を同じくする種から種への転用」によるものである。ここでいう「そのライオン」（The lion）は、ライオンという動物ではなく、アキレウスという人間を指し示している。アキレウスとライオンの両方は動物という類に属し、「種と類によるカテゴリーの移動」に基づき、一方でもって他方を指し示すことが出来る。

アリストテレスのこの「アキレウスとライオン」の例は、ほとんどのメタファー理論では、「アキレウスはライオンだ」と「アキレウスはライオンのように勇敢だ」という形で用いられる。そして、これらの表現は、それぞれメタファーと直喩という解釈を与えられる。しかし、このような解釈は単に伝統的修辞学者達が彼ら自身の視点を正当化するために、都合のよいように解釈したことに違いない。上で見たように、アリストテレスの、この事例を正しく理解し、解釈するためには、その背景知識(background knowledge)を知ることが重要である。上のメタファーの事例は、ギリシア神話を舞台としている。アキレウスはその神話に出てくる英雄であり、敵の将軍と激しく戦っている場面を表したものである。それは、決して、修辞学で言うように、アキレウスとライオンを比較し、それらの間の単なる属性的類似性に注目しているのではない。アリストテレスが言う類比関係とは、属性的類似性のことではなく、むしろ、アナロジー的思考によって把握された関係性である。

3 認知言語学的考察

ここで、アリストテレスのメタファー理論と比較するため、認知言語学的視点からメタファーについて考察する。主に、レイコフとジョンソンの「概念構造としてのメタファー理論」とフォコニエの「認知語用論的メタファー理論」を手がかりとする。

レイコフとジョンソンは、単なる言葉の修飾としてのメタファー、つまり、「修辞的文彩の一つ」という見方を全般的に批判する。そして、メタファー論に「構造性」と「身体性」を導入し、認知的アプローチから「概念構造としてのメタファー理論」を構築する。その理論によれば、メタファーは「言語活動のレベルを超えた、人間の思考や行動のレベルで機能する概念構造」である。メタファーは我々の経験を概念化するための「認知メカニズム」である。なぜならば、メタファーは、二つの異なる概念領域を連結する「投射マッピング」であるからである。

たとえば「life is journey (人生は旅である)」という事例を見てみよう。ここには、「人生」と「旅」という、二つの異なる概念領域がある。そこで、投射マッ

ピングにより、異なる二つの概念領域が結びつけられる。つまり、「旅」についての知識構造の一部が「人生」へと写像されることになる。例えば、旅には、旅をする人がいて、道のりがあり、経路や、出発地、滞在地あるいは目的地などがある。それ以外にも、乗り物、同伴者、案内人などの要素があったりなかったりする。同様に、人生には、人生を送る人がいる。この世に生まれたことが人生の出発となり、その人が歩んだ道は人生の行路となり、その人の死が人生の終わりとなる。このように、人生には、存在者（人）、始まり、経路、終わりなどの要素がある。そして「人生」と「旅」の間には、ある「対応関係」が生じ、旅についての知識構造の一部分は人生へと写像される。

このような写像が成り立つには、「人生」と「旅」はそれぞれ、異なる概念領域であるゆえに、必ず、明確な意味での「根源領域(source domain)」と「目標領域(target domain)」とが区別されねばならない。この場合は、「人生」は「目標領域」であり、「旅」は「根源領域」である。

つまり、「根源領域」である「旅」についての知識構造の一部分は「目標領域」である「人生」へと投射され、「人生」という概念を組織化する。つまり、我々は人生を旅という形で経験し、理解することが出来る。

これと関連して、フォコニエは、語用論を認知的アプローチから考察し、「認知語用論のメタファー理論」を構築する。フォコニエは、談話が我々の心の中に作り出した部分的で、局所的領域を「メンタル・スペース (mental space)」と命名し、スペース同士は投射マッピングで連結される、と考えた。さらに、投射マッピングは、概念融合(conceptual blending)という、重要な認知プロセスを生成する。最終的に、概念同士が融合し、独自の創発構造により、新しい概念を構築する。その時にある一定の規則を守らなければならない。それは、「時刻と位置を保持」することである⁽¹⁰⁾。つまり、「空間的な位置関係」と「時間的な順序関係」がそのまま投射されることになる。このことがフォコニエとターナー (Fauconnier and Turner 1994,1996) では詳しく分析されている。

そこで、次の「仏教僧と山の謎々」について考えてみよう。

仏教僧がある日の明け方に山を登り始め、日没に頂上に着き、数日頂上で瞑想し、ある明け方に麓に向けて山を下り始め、日没に麓に着く。出発時間や休憩時間、あるいは歩く速さについていかなる仮定もせずに、二つの移動において、この僧が一日の同じ時刻にいる場所が経路上に一か所あることを証明せよ⁽¹¹⁾。

つまり、仏教僧は、山を登る経路と山を下りる経路の中、同じ時間に自分自身に出会う場所がある、ということを示すことである。だが、このような場所が実際に存在する、ということを示すには、その人が、同じ日に山に登り、そして、山を下りて来たと想像する必要がある。ところで、それはありえない話である。同じ人が同じ日に山に登ることと山を下りることを同時に行うことは、無理なことであり、ましてや、自分自身に出会うということとはあり得ない。

この謎が、メンタル・スペース理論では、上手く説明される。

まず我々は、上の発言から、移動者、場所、日にち、辿った経路などの知識構造を含んだ総称スペースを得られる。そして、＜仏教僧は山に登り＞、また＜山を下りる＞という発話の進行につれ、それぞれ、入力スペース 1 と入力スペース 2 が構成される。この 2 つの入力スペースには、それぞれ、山、移動者、移動日、移動した経路などの知識構造が含まれる。

そして、投射マッピングにより、入力スペース 1 と 2 の部分的構造が、第 4 番目のスペース、所謂、融合スペースへと投射される。融合スペースでは、2 つの対応する同じ坂道（登坂と下り坂）は単一の坂道にマッピングされる。2 つの移動日は単一の日にマッピングされ、融合する。しかし、登るときの仏教僧と降りる時の仏教僧がいる場所は、1 日の時刻に従い、移動方向を保ってマッピングされるため、融合できない。

結局、二人の仏教僧は同じ日に、一人は山を登り、一人は山を下りるということと同時にやっている、ということになる。彼らが同じ日に移動しているので、二人の位置は移動のいかなる時刻においても比較できる。

フォコニエは、このように、指示構造を分離し、それを独自の原則に基づいて働く、独立の構造領域と考えた。それは、まさに異なる領域間の投射マッピングが行われる、最適の条件を満たすことになった。

そこで、次に以下の慣用表現を考えてみよう。

to dig one's own grave.

(墓穴を掘る)

常識的に考えて、ある人間の墓穴を掘るのが、その人が死んでからのことであり、ゆえに、その人は自分で自分自身の墓穴を掘ることが考えられない。だから、この慣用表現は我々には、「ある人が無意識的に失敗することをやっている」という意味合いで理解される。結局、自分がやったことが自分を落とし穴に入れてしまったということになる。フォコニエが言うように、この慣用表現は因果構造が逆転した、メタファーの特殊事例である。

メンタル・スペース理論では、このパラドックスには「墓、死体、埋葬」などの知識構造を含意した具体的領域と「知らずに間違ったことをする、結局は失敗する」という知識構造を含意した抽象的領域の2つの領域が存在する。それらはそれぞれ、入力スペース1と入力スペース2の二つの入力スペースを構築する。そして、この2つの入力スペースの部分的構造が第三の新しいスペース、所謂、融合スペースを構築することによって、新しい知識構造を生成する。融合スペースでは、墓、穴掘り、埋葬という具体的構造を入力スペース1から受け継ぎ、因果構造、意図に関する構造、内的イベント構造の方は、入力スペース2から受け継がれる。そして、この二つの入力スペースから受け継がれた構造が融合スペースで、固有の創発構造を作る。

融合スペースでは、＜死んだら墓を掘るのではなく、墓の存在が死の原因であり、かつ必要前提条件＞となる。結論として、融合スペースでは＜自分の墓を掘るのは自分の死を促すような行為であるため、重大な誤りである＞という知識構造、または推論のパターンが生まれる。要するに、メンタル・スペース理論では「墓穴を掘

る」という慣用表現の意味理解の成り立ちを上手く説明できる。というのは、現実世界では自分で自分の「墓穴を掘る」のはあり得ない行為であることが誰でも分かっているはず。他方、この慣用表現は、ある人間は自分の利益のためにやったある行為が結局間違っていたことを意味している。つまり、「墓穴を掘る」という慣用表現から＜人間が死んだら墓の穴を掘る＞という文字通りの非メタファー的概念がある一方、＜自分でやったある行為はとんでもないミスを招き、その行為は結局失敗へと繋がっていく傾向を表した＞というメタファー的概念も含意されていることが、メンタル・スペース理論ではより詳細に説明されている。

例えば、私は＜サリーは亡くなった＞と言ったとしよう。その時に、我々は自然にサリーのために＜墓穴を掘る＞という行為をする。

他方、話者である「私は墓穴を掘る」と言った場合に、この表現では話者が一体誰のために＜墓穴を掘る＞かは不明確である。＜他人のために墓穴を掘る＞というケースと＜自分の墓穴を掘る＞というケースが生じる。そして、そのような私の談話から、我々の心の中にそういった二つの部分的で、局所的領域が創り出される。つまり、＜他人のために墓穴を掘る＞という入力スペース1と＜自分の墓穴を掘る＞という入力スペース2が創り出されることになる。そして、そのような二つの入力スペースはメタファー的投射マッピングによって連結され、融合されることによって新しい概念領域を構築するわけである。ここで重要なのは、入力スペース1と入力スペース2の全ての知識構造が融合されるわけではない。融合されない知識構造には「時間的順序関係」と「空間的位置関係」がある。つまり、融合スペースでは、＜他人のために墓穴を掘る＞という入力スペースから、墓、穴掘り、埋葬者（他人）などの具体的経験領域の構造が投射され、＜自分の墓穴を掘る＞という入力スペースからは、墓、穴掘り、埋葬者（自分）などの抽象的概念領域の構造が投射される、融合される。そこからは、＜死んでない人（私）が墓の穴に入ろうとしている＞という新たな概念領域が生まれるわけである。

つまり、このように具体的経験領域の構造と抽象的概念領域の構造が構造化され、＜私が自分のためにやったある行為が自分を落とし穴に入れようとしている＞という推論のパターンが生じる。従って、それは私の思考様式の変化をも表している。

言い換えれば、現実世界においては＜死んだ人は墓の穴に入る＞が、＜生きている人も墓穴に入ろう＞としていることから死に近いことを意味する。それはある意味で、我々がやっているある行為は身の破滅を招いていることを示唆する。すなわち、自分がやった行為はミスを犯し、自分で自分のことを落とし穴に突き落とそうとしていることを、＜墓穴を掘る＞という仕方概念化したことを言っている。つまり、そのような概念が、メタファー的投射によって、抽象的概念領域として我々の概念体系に構築されたのである。

すなわち、ここでは「種と類の関係に基づくカテゴリーの転用」が行われていることが分かる。＜墓穴を掘る＞ことも＜落とし穴を掘る＞ことも同じく＜穴を掘る＞という行為の一種である。＜墓の穴＞は＜死んだ人のために掘った穴＞であるが、＜落とし穴＞は＜生きている人のために仕掛けた穴＞である。

4 終わり

本論では、アリストテレスのメタファーの本質を探り、その結果、アリストテレスが定義したメタファーは、所謂、修辞学で言う「単なる言葉の綾」ではなく、修辞的文彩一般を指す広義のメタファーであることが分かった。従って、認知言語学視点から考察し、メタファーとは、言語活動のレベルを超え、思考や行動のレベルで機能する「認知構造」であることが分かった。

アリストテレスのメタファー理論では、メタファーは「種と類の関係に基づくカテゴリーの移動」であるゆえに、基本的思考様式の一つでもある。そして、認知メタファー理論では、異なる領域を結びつける「領域横断マッピング」であり、最終的に、概念体系を構築する「認知メカニズム」となることがわかった。

注

- (1) Paul Ricœur (1975), *La Métaphore vive*, Le Seuil, p.13. 邦訳: ポール・リクール、『生きた隠喩』、久米博訳、岩波書店、1984年、2頁。

- (2) アリストテレス『詩学』1459a5-8。
- (3) アリストテレス『詩学』1450a-b。邦訳:『アリストテレス全集』第17巻、岩波書店、30-31頁。悲劇の構成要素には六つある。それらの要素の一つ一つがどうあるかによって、悲劇の質が決定せられる。それらはすなわち以下の六つである。(1) 筋、(2) 性格、(3) 語法、(4) 思想、(5) 外観、(6) 音楽。これらは思うに、悲劇詩人たちが何によって再現するかという手段に当たるものとして、語法と音楽の二つがあり、いかに再現するかという方式に当たるものとして外観、何を再現するかという対象に当たるものとして、筋、性格と思想がある。
- (4) アリストテレス『詩学』1457b。
- (5) アリストテレス『カテゴリー論』1a1-6。
- (6) George Lakoff and Mark Johnson (1980), *Metaphor We Live By*, University of Chicago Press, p.43-46. 邦訳:『レトリックと人生』、渡辺他訳、1986年、53-61頁。それらは、「全体—部分」、「入れ物—中身」、「産物—産地」、「原因—結果」、「主体—属性」、「作者—作品」、「所有者—物(主体—物)」など。
- (7) アリストテレス『弁論術』1406b20。
- (8) アリストテレス『弁論術』1407a11-15。
- (9) アリストテレス『弁論術』1406b22-23。
- (10) Fauconnier, Gilles (1997), *Mapping in Thought and Language*, Cambridge University Press, p.151. 邦訳:ジル・フォコニエ、『思考と言語におけるマッピング』、坂原茂他訳、岩波書店、2000年、191頁。
- (11) Fauconnier, Gilles (1997), p. 151. 邦訳: 同書、190頁。

